西　高　創　世　記

札幌二中から西高・４万人の青春「百年の物語」より

札幌に２つ目の北海道庁立男子校として誕生

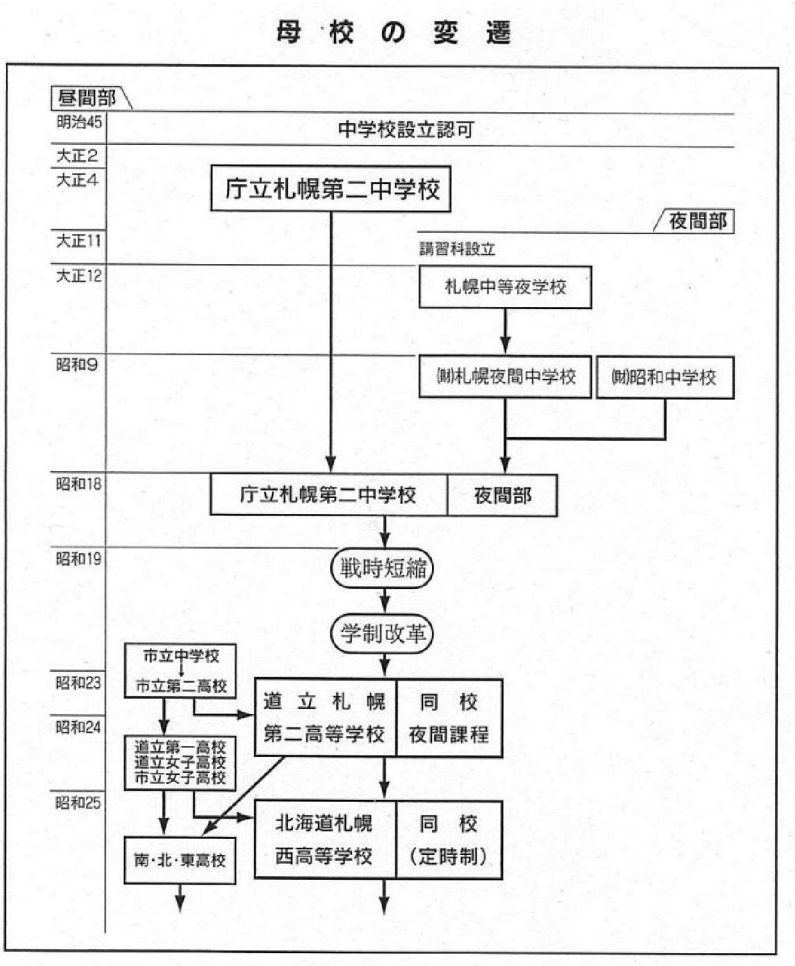
当時、北海道庁立の男子校は、札幌中学（旧一中、現札幌南高）、函館中学（現函館中部高）、小樽中学（現小樽潮陵校）、上川中学（現旭川東高）の４校だけで、札幌には１校しかなかった。

北海道の開拓と植民が進んで札幌の人口が過去10年間で約２倍に膨れあがる（約９万人）とともに、子弟の教育熱も高まり、札幌中学の倍率が約４倍という狭き門となっていた。これらを背景に、明治45年（1912年）、釧路中学（現釧路湖陵高）とともに道内５番目の庁立男子校として、本校第二札幌中学の開設が認可された。

札幌に２つ目の庁立男子校として本校が誕生した当時の札幌には、他に、札幌高等女学校（現札幌北）、区立女子職業高校（現札幌東高）、私立の男子校として北海中学（現北海高）、女子校としては北星女学校（現北星学園高）、北海高等女学校（現札幌大谷高）があった。

札幌南高とは兄弟、北高・東高とも親戚関係

明治45年（1912年）春に、第二札幌中学（本校）の２クラスと札幌中学（旧一中、現札幌南高）の３クラスが、まるで１つの学校のようにまとめられて入学者選抜が行われた。当時北10条西４丁目（今の北大前）にあった札幌中学の校舎を利用して授業がスタートしたため、札幌中学と本校はまとめてクラス分けされ、甲、乙、丙、丁、戊の５クラスのうち、本校は乙と丁のクラスがあてがわられた。札幌中学21期生と第二札幌中学一期生は、同じ試験で入学し同じ校舎同じ先生の下で学ぶ兄弟関係にあった。なお、本校開校３年後（大正４年（1915年）に、札幌中学が札幌第一中学、第二札幌中学が札幌第二中学と改称した。

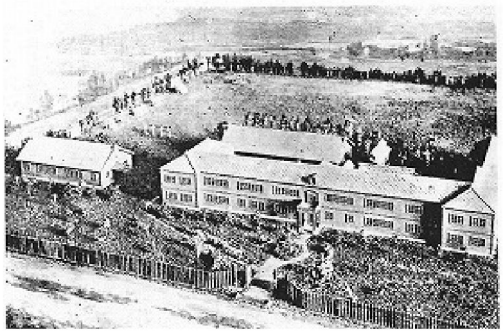


また、昭和２５年（1950年）に、道立札幌第二高校（本校）と札幌第一高校（現札幌南高）、道立女子校（現札幌北高）、市立女子校（現札幌東高）の四校が、男女共学と小学区制のため東西

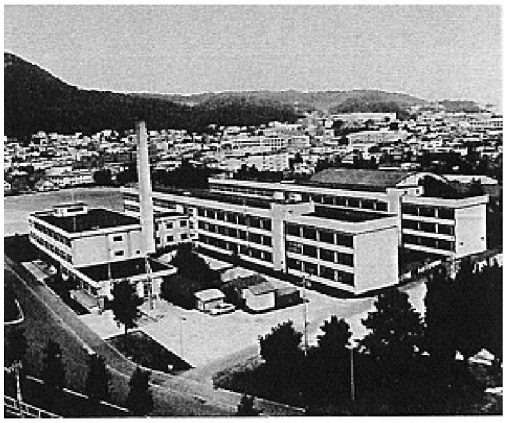
南北高に再編され、在校生は各校に強制的に移動させられ、級友と泣く泣く別れた。この改革は、各校の特色や独自性が失われるなどの反対が強かったが、もっとも反対が少なかったのは二高（本校）であった。共学実施を前に、ＮＨＫの公開討論会が大通公園で開かれたが、この時、二高生は「異性から学ぶことは多いはずだ」などと柔軟な発言をしていた。男女共学の新しい学校がスタートしたのは、女子トイレを新たにつくるなどの準備に時間がかかり、４月ではなく５月１日であった。この日が、「北海道札幌西高等学校」の誕生日であり、現在の開校記念日となっている。

本道を代表する初代校舎

大正２年（1913年）に北３条西１８・１９丁目に校舎が建設された。明治初期に長野県の上諏訪から本道に移住し、果樹栽培や養蚕事業を営んでいた篤志農家の宮坂坂蔵氏が安い価格で土地を提供するとともに一部を寄付して、約３ヘクタールの土地に校舎が建築された。まず同年３月に屋内体操場と物置などが完成し、工費は36,156円であった。体操場を板囲いで４つに仕切って教室に当て、校長室や職員室は物置を当てた。


畑の中に建った二中の校舎（1921年頃撮影）

校舎周辺は「桑園」という地名があるとおり、西20丁目まで桑畑が広がり養蚕試験場もあった。昭和25年創部の本校文芸部の機関誌「桑畑」も、これに由来する。周囲に民家がほとんどない畑と草原の中に、エメラルドグリーンのペンキに塗られた二階建ての木造校舎が忽然と現れた。それが本校の初代校舎である。当時としてはモダンで洒落た校舎であり、そうした他校に例のないお洒落な校舎の伝統は、スチーム暖房・水洗式トイレなど本道の公立高校のモデルとなった二代目レンガ校舎、そしてレンガ校舎の面影を残しつつ、三層吹き抜けのアトリウムがある今のW型校舎に引き継がれている。


二代目校舎

「西校は消えず！」～たった三ヶ月でも西高が好きになる～

当時の本道を代表するモダンな初代校舎は、昭和３５年（1960年）定期テスト直前の７月９日土曜日未明に出火した。駆けつけた教師・生徒が立ち尽くす中、札幌市の消防車全25台が出動し消火に当たったものの、屋根があっけなく焼け落ち、大半を焼失した。悲壮感が漂う中、翌日、一年の女生徒二人が、焼けこげた柱や机などが散乱する中を夢遊病者のように歩いているとき、小さなチョークが散らばっているのを見付け拾った。一人が、黒ずんだ廊下の外壁に黄色で「西校」と書いた。もう一人の生徒が、

「西高は消えず！」の文字。生徒たちを奮い立たせた

ほんの少し前に、学校の横を通った二人の北高生が「西高もなくなったなあ」と言い合っていたのを思い出し、白いチョークで迷わず「消えず！」と続けた。「たった三ヶ月の西高生でも、こんなに西高が好きなの、という思いをようやく誰かに伝えられたような気がした」と言う。この「西校は消えず！」の落書きは、新聞でも報道され、大きな話題になるとともに、茫然自失の生徒や教師の心を奮い立たせ、西高再建へと心を一つにする絆となった。かけがえのない学舎が無惨にも焼け落ちたが心の中にまだ生きているという、校舎に対する愛おしい気持ちが、落書きの「高」を「校」に無意識にしてしまった。この落書きは、西高生の母校を思う強い気持ちの表れとして、いつまでも語り継がれることであろう。

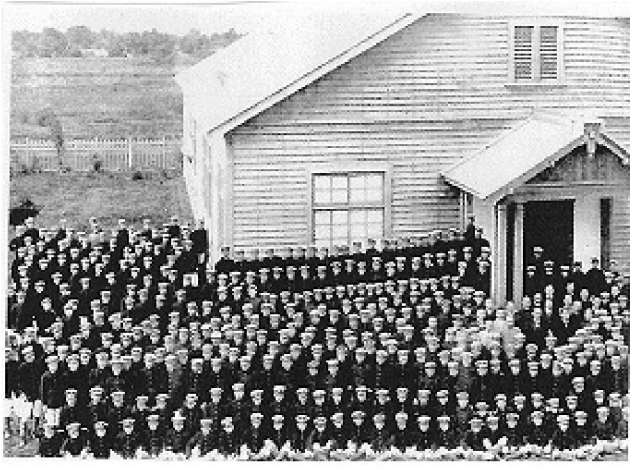
全国屈指の学校を目指して創立～初代校長と「善波賞」～

善波功・初代校長

初代校長として、一中の教頭である善波（ぜんぱ）功が任命された。教頭も一中の教員から昇任した。善波は福島県出身で、旧制第二高等学校（現東北大学）から東大文学で学び日本史を専攻した。眼光には烈々たる気魄があり会津武士の面目躍如たる風貌であったらしい。運動を奨励したため、生徒は冬休み中に剣道の寒稽古に励み、その後の漢文の素読会には善波も率先して参加し範を示した。生徒はその姿に見惚れたという。善波は、本校を創立するにあたり、北海道の小天地を目標にするのではなく、全国屈指の学校を目指していた。その結果、本校の名声は北海道における模範校となり、当時、道庁ではどこの学校を視察したらよいかと問われると、すぐに二中と答えるようになっていた。善波は二中に３年６ヶ月勤務していたが、二中一期生の卒業を見届けることなく、当時の県知事や首相などから教育者としてのたぐいまれな手腕が買われ転出し、全国の困難校や名門校を歴任した。

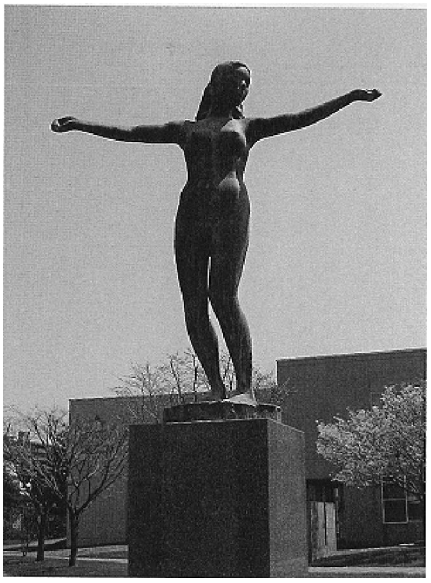
昭和31年（1956年）高知市の自宅で81歳の生涯を閉じたとき、遺族から西高に多額の寄付の申し出があり、その意志に応えて創設されたのが「善波賞」である。社会に対して顕著な貢献をした者、文化やスポーツなどで優れた成績を収めた者などに対して、今日まで50名を超える生徒に贈られている。善波の教育理念と情熱が、今日の西高生にも確かに引き継がれ、「善波賞」という形で現れている。

「北海道の学習院」と呼ばれ


善波校長送別式での記念写真

初代校長善波は、礼節を重んじ生徒に徹底的にたたき込んだ。規律はかなり厳しく、特に服装には厳格であった。それでいて学生服のボタンは、一中の平凡な桜の模様に対し、二中のそれは校章入りとなかなか洒落ていた。また、遅刻は厳禁である。しかも始業10分前に校門が閉じられ、冬に遅刻した生徒は、反省のため、寒さに耐えながら雪踏みをさせられた。校内でも校外でも先生や上級生に会うと敬礼をさせられた。男女交際など考えられない時代であるため、庁立高等女学校（現札幌北高）の寄宿舎のあった北２条西11・12丁目の北側は通行禁止となっており、生徒は厳格に従っていた。このように、善波の指導の甲斐があって、二中生徒は、礼儀正しく身だしなみがよかったため、世間から「北海道の学習院」と呼ばれるようになっていた。

自由な校風



百年前、札幌中学から一中（現札幌南高）と二中（本校）とに分かれた経緯から、両校は何かにつけて比較されてきた。例えば、一中生は「バンカラで、硬派、ガリ勉型」に対し、二中生は「おとなしく、軟派、のんびり型」と言われたり、「二中は次男坊だからおっとりしている」というもっともらしい言い方もよく聞く。多くの優れた芸術家を輩出しているため「文芸的気質」と称されることもあり、「文芸的」は誇るべき西高の伝統に間違いない。

戦後、西高になってからの校風は「自由闊達」であり、特に西高生は「自由」という言葉が大好きである。現在も「自由」を西高の伝統・校風として挙げる生徒が圧倒的に多い。西高の前庭に立つ乙女像「蒼穹」は彫刻家の佐藤忠良（二中14期卒業）の作である。佐藤は、「自由というのは、何も束縛のないことだと思われがちですが、何らかの束縛があってこそ本当の自由がある」と言った。少女が両手を広げて空を舞うような姿を見ながら、あらためて「自由」を考えてみてはどうだろうか。